様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００８０２

研究課題名（和文）留学の学習効果に関する縦断的研究：学習者のロシア語習得過程と異文化への意識の変容

研究課題名（英文）How does study-abroad experiences shape language learning processes and multicultural awareness?: The longitudinal study of Japanese learners learning Russian in Russia

研究代表者
横井　幸子（Yokoi, Sachiko）

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・准教授

研究者番号：７０６３５１１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：2020年以降ウィルスや戦争の影響により、ロシア語の学習環境が一変した。日露交流はオンラインになり、交流先もロシアから多言語地域であるロシア語圏に拡大した。それに伴い学習内容もロシア語・文化だけでなく、複数言語・文化を扱う必要性が生じている。本研究では、多言語性をロシア語学習に活かす方法としてトランスランゲージング教授法を検討し、その活用の可能性を指摘した。多言語スペースの構築方法や学習方略を検討し、授業での複数言語の活用方法とその意義，さらに日本のロシア語教育における多言語性について論じることができた．以上のような研究成果を踏まえて、最終年には高校生向けのロシア語の教科書を開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本の高校ではロシアとの地域間交流に根ざしたロシア語教育が続けられてきたが、社会情勢の変化により交流先が旧ソ連圏に拡大しており、多言語・多文化性を踏まえた学習内容への変更が必要となっている。そこでトランス・ランゲージング理論を採用し，ロシア語の授業における複数言語の活用方法とその意義を検討し、高校生向けの教科書を開発した。これは第2外国語教育を多言語教育の枠組みの中で捉え直し実践してみるという新しい試みであり，まだ研究の蓄積が殆どない領域である．本研究により、外国語としてのロシア語教育を多言語教育の枠組みの中で捉え直し、新たに多言語性を活かしたロシア語教授法の開発を進めることができた。

研究成果の概要（英文）：This study initially aimed to explore how study-abroad experiences in Russia may shape Russian language learning processes of Japanese high school students and their multicultural awareness. However, the COVID pandemic and the invasion of Ukraine by the Russian army led to the suspension of travel to Russia, and the learning environment surrounding Russian language learners changed drastically. Although Russian language courses are still offered in high schools, exchange programs have been switched from face-to-face to online. In light of these major changes in global conditions, as well as the multilingual nature of Russian as a foreign language in Japan this project examined translanguaging pedagogy as a way to promote multilingualism in Russian language learning in Japan. Based on the results of the above research, a Russian textbook for high school students was developed in the final year of the project.

研究分野：ロシア語教育

キーワード：ロシア語教育　多言語教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

2018 年 3 月 30 日,新しい高等学校の学習指導要領が公布され,新たに「社会に開かれた教育課程」という理念が掲げられた (e.g., 文部科学省, 2018). 急速に進むグローバル化や情報技術の革新によって多様に変化を遂げる現代社会にあって,子供たちがそのような社会の多様性や急激な変化に「積極的に向き合い」(文部科学省 2018, p. 1),「学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し,… 生涯にわたって能動的に学び続けることができるよう」(文部科学省, 2018, p. 3),家庭や地域と連携・協働することで,より「主体的・対話的で深い学び」(文部科学省, 2018b, pp. 3-4)を実現することを目標としている.

日本の高校のロシア語教育は,このような「社会に開かれた」教育を実施する土壌が既にできあがっている(e.g., 臼山, 2003). ロシア語科目を開講している高校の多くは,ロシアとの地域間交流に根ざした第 2 外国語教育として地元主導で開講され存続してきたという経緯があり,ロシアの学校との交流を継続して実施している(e 臼山, 2003; 林田, 2010; 横井, 2015; 2019; 2020). このように,高校では日露交流を積極的に行っているところが多いが,授業ではどのようにロシア語が教えられているのだろうか. また,日露交流は生徒たちのロシア語学習過程にどのように位置付けられているのだろうか.

２．研究の目的

本研究プロジェクトは,グローバル化に対応した多言語・多文化教育の一環として日本の高校における「社会に開かれた」ロシア語教育体制の構築を目指し,これまで殆ど着目されてこなかった日露交流や留学における第 2 言語習得過程と異文化理解能力の相関性に焦点を当てて,その学習効果とメカニズムを具体的に明らかにすることを目的とし,当初**下記の研究設問を設定した：**

a) 日露交流やロシア語圏への留学を通じて,ロシア語学習者は,どのような第 2 言語習得過程を経るのか？

b) 日露交流を経験して,あるいは海外留学期間中,ロシア語**学習者の内面**,特に異文化に対する意識がどのように変容するのか？

本プロジェクトが始まった 2020 **年当初から,新型コロナウィルスの影響によりロシアへの渡航が中断された. その後** 2021 **年秋より日本からロシアへの留学生派遣が再開され,本プロジェクトでも** 2021 **年** 9 **月,ロシア在住の日本人留学生** 5 **人に対してデータ収集を開始した. ところが,**2022 **年** 2 **月** 24 **日ロシア軍によるウクライナ侵攻が勃発し,日本人留学生全員が帰国を余儀なくされた. 結果として,データ収集は** 2022 **年** 1 **月まで２−３回実施した時点で中断した. 日本からロシアへの留学は,**2024 **年** 5 **月現在も中断したままである.**

上述の通り,データ収集に大きな制約を受けていた状況を踏まえて,本プロジェクトでは,国内でのデータ収集に切り替え,それに合わせて研究目的を改めて設定することにした. まず,オンラインで日露交流を続けている高校生とその教師の他,ロシア語圏からの留学生も研究対象として,国内で主にフィールドワークとインタビューからなる質的調査を縦断的に行い,(1) **ロシア語学習にオンライン交流と高大連携がロシア語学習,**(2) (1)**の調査結果を踏まえて高校生向けのロシア語の教科書を開発することとした.**

３．研究の方法

本研究プロジェクトでは,日露オンライン交流に参加していた高校生及びその教師,2021 年 9 月から 2022 年 2 月までロシアに留学していたロシア語学習者,そしてロシア語圏から来日していた留学生を研究参加者として募り,下記の方法で研究を進めた.

(1) 質的調査

日露交流や海外留学を通じて学習者に芽生える異文化に対する意識の変化について,ロシア語を学び,オンラインの日露交流に参加している高校生とその教師への聞き取り調査を行う．また,ロシア語圏からの留学生に対しても,同様のテーマで定期的にインタビューを実施する．インタビュー内容は音声データとして収集し,質的に分析する.

(2) 高校生向けの教科書の開発

2)で明らかになった高校生や教師に対する聞き取り調査の分析結果を基に,ロシアの生徒たちとロシア語で交流するために必要なロシア語の知識を獲得できる教科書の開発を行う．高校生向けの教科書開発自体は先行科研費プロジェクトにおいて 2019 年に開始されたプロジェクトであるが（横井幸子, 基盤研究 C, 課題 No. 17K028 84, 2017-2020）,コロナウィルスや戦争の影響により,ロシア語教育全体が多大な影響を受け,日露交流そのものにも再考が求められている．本研究プロジェクトでは,このような状況を踏まえて,開発途中であった教科書を基盤としつつその内容を再検討し,これを完成させることを目指す.

４．研究成果

2020 年春以降,ロシア語教育はウィルスと戦争に翻弄されてきた．1990 年頃から地元主導で続けられてきた日露交流は全てオンラインに切り替えられている．また,戦争により,ロシアに対する世界の眼差しだけでなく,ロシア連邦内の情報統制も益々厳しくなっており,日露交流,そして広くはロシア語学習自体が政治性を帯びてきている．そのような状況下で日露交流を続けることの意義は上述の通りであるが,実施の際にはいつどのような形で誰と何について語るのか,事前の周到な準備が求められる.

本研究ではまず,日露交流が対面からオンラインに以降している状況を勘案し,オンラインでの交流の充実を図った．オンライン交流のスペースは，日露学習者双方の母語と学習言語の組み合わせが鏡像関係にある多言語環境である．すなわち,日本側の学習者の言語的背景は，主に母語が日本語，第 2 言語が英語，第 3 言語がロシア語，ロシア側は母語がロシア語，第 2 言語が英語，第 3 言語が日本語となっている．すなわち，母語と第 3 言語が日露で鏡像関係になっており，英語がその中間で第 2 言語として共有されている．従って,日露交流を行う際,相互の言語学習機会を確保し,英語でのコミュニケーションに終始しないようにするための工夫が求められた．そこで,本研究は,ある高校のロシア語の授業を学習の場として維持しながら,日本のロシア語学習者とロシアの日本語学習者が日本語,ロシア語,英語を往来しながらオンラインで交流する「トランス・ランゲージング・スペース」(García, Johnson, & Seltzer, 2017; García, & Wei, 2014; 加納, 2016a; 2016b; 2021)を創り出し,学習機会を広げる試みを行った．この高校では,日露交流に必要なロシア語表現のインプット,理解,思考を深める活動を教室内で行い,アウトプットの場としてオンラインでのチャット（＝ダイアローグ）と口頭発表（＝モノローグ）を用いた．この二つの異なる伝達モードを組み合わせることで,多様で包括的な言語使用の機会を提供することができた．日露交流を言語学習過程に組み込む場合，母語と学習言語を鏡像関係に置いてトランス・ランゲージング・スペースを構築することで，これがコミュニケーションと学

習のベースとなり，第１外国語（＝英語）を含めた自由な言語往来を許容するスペースにおいても，学習言語でのコニュニケーションが自ずと生じるようになると思われる．このように,トランス・ランゲージングの学習方略的活用と自然な言語実践の両方を組み合わせることによって，多言語共生にまで踏み込んだ質の高いロシア語学習が可能になる．そのようなトランス・ランゲージング・スペースでは，互いに教え合い学び合う関係が必然的に，そして有機的に構築されうることが明らかになった．

続いて,上述の研究成果を踏まえて,高校のロシア語学習者のための教科書開発に取り組んだ．既存の教科書では,定期的に日露交流を行っている高校生のニーズに対応できず,結果として,日露交流プログラムは課外活動として扱われがちであった．日露交流に必要な表現や知識を通常の授業で学びながら同時に交流を進めていけるような,日露交流と通常の授業を統合したプロジェクト型学習プログラムのための教材が必要とされていた．このような教科書の開発そのものには 2019 年度先行科研において既に着手していたが(基盤研究 C，課題 No. 17K028 84),2020 年春以降の COVID 及びロシア軍によるウクライナ侵攻により,日露交流の形態と内容が大きく変わったため,教科書で取り上げる表現もオンライン交流を前提とする学習内容に変更した(図１を参照)．

図 1. 日露交流のためのロシア語教科書 «Мост（橋）»
左：表紙（デザインは研究参加高校の美術教員が担当）
中：第 10 章「贈り物」（挿絵は研究参加高校の生徒が担当）
右：第 11 章「将来」（挿絵は研究参加高校の生徒が担当）

教科書の作成には,当該高校の生徒,教員,ロシア語圏からの留学生が参画した．例えば,教科書に含めるべき学習項目の選定には高校の教員と,ロシア語テクストの作成にはロシア語圏からの留学生と協働で取り組んだ．また,表紙のデザインは当該高校の美術教員が,挿絵は生徒が担当した．このように,「社会に開かれた」ロシア語教育を標榜し,日露の横の繋がりだけでなく,高大接続など縦の繋がりも加えることで,高校生,大学生,ロシア語圏からの留学生,教員たちがそれぞれ自分たちに担うことのできる役割を認識し,計画されている交流プログラムの実現に向けて主体性を発揮する様子が見られた．

2024 年 5 月現在,高校でのロシア語の授業は継続されているが,対面での日露交流を実施する目処は全く立っていない．ロシアの学校とのオンライン交流の実施も困難になってきている中,新たにロシア語圏の学校との交流が少しずつ始まっている．また,日本国内においても,ウクライナからの生徒への支援が各地で続けられており,本プロジェクトに参画した高校でも,ウクライナからの生徒の短期受け入れを経験している．実際にロシア語も話すウクライナ人と机を並べて

学びながら,生徒一人一人がロシア語を学ぶことの政治性に向き合っている．今後,ロシアとのオンライン交流,ロシア語圏での対面交流学習など,ロシア語を使った交流の多様化が予想される中,ロシア語ディアスポラの現実,そしてロシア語を使うこと,学ぶことの政治性に配慮しながら,ロシア語を使って他者と対話していく力の育成が求められることになるだろう.

主要参考文献

García, O., Johnson, S. I., Seltzer, K. (2017). *The translanguaging classroom: Leveraging student bilingualism for learning*. Caslon.

García, O., & Li Wei (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism and Education*. London: Palgrave Macmillan.

加納なおみ (2021).「トランス・ランゲージングをとりいれたライティング授業」**令和 3 年度「教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業（グローバル化に対応した外国語教育推進事業）」ワークショップ**, 大阪大学.

加納なおみ (2016a).「トランス・ランゲージングを考える: 多言語使用の実態に根ざした教授法の確立のために」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』, 12, 1-22.

加納なおみ (2016b).「トランス・ランゲージングと概念構築: その関係と役割を考える」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』, 12, 77-94.

Леонтьев, А. А. (1974). *Речевая деятельность // Основы теории речевой деятельности*. М.

Li Wei. 2011. Moment analysis and translanguaging space: Discursive construction of Identities by multilingual Chinese youth in Britain. *Journal of Pragmatics*, 43(5), 1222-1235.

Moll, L. C. (2013). *L S Vygotsky and education*. Routledge.

Turnbull, M., & Dailey-O'Cain, J. (Eds.). 2009. *First language use in second and foreign language learning*. Bristol, UK: Multilingual Matters.

Выготский, Л. С. 1996. *Мышление и речь*. М.

Выготский, Л. С. 1935. *Умственное развитие ребенка в процессе обучения*, Государственное учебно-педагогическое издательство, М-Л.（**土井捷三・神谷栄奇訳**, 2003.『**「発達の最近接領域」の理論**』**三学出版**）.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 横井幸子、佐山豪太、鈴木桃子、高橋健一郎、依田幸子	４．巻 13
２．論文標題 日本の外国語としてのロシア語教育における多言語性とトランス・ランゲージング教授法	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ロシア語教育研究	６．最初と最後の頁 45-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 横井幸子、高橋健一郎、佐山豪太
２．発表標題 日本の外国語としてのロシア語教育における多言語性とトランス・ランゲージング教授法
３．学会等名 日本ロシア語教育学会　西日本・東日本合同例会
４．発表年 2022年

１．発表者名 横井幸子
２．発表標題 高校のロシア語教育における多言語・多文化性：ロシア語「だけ」を学ぶ時代の先を見据える
３．学会等名 日本ロシア文学会・日本ロシア語教育学会共催　日本におけるこれからのロシア語・文学・文化教育：多言語・多文化共生と教育のポリティクス
４．発表年 2022年

１．発表者名 横井幸子
２．発表標題 日露交流を通じて学習者に芽生える多言語共生の意識に関する調査：札幌国際情報高校の場合
３．学会等名 Summer Institute on International Education, Japan (SIIEJ) 2021（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 遠藤 雅公，鈴木 桃子，依田 幸子，横井 幸子
２．発表標題 ICTを活用した日露交流とロシア語の学びについて
３．学会等名 ロシア語教育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 横井幸子、依田幸子
２．発表標題 ポストコロナ時代を見据えた「社会に開かれた」ロシア語教育課程の再構築：ICTを活用した日露交流をベースとしたロシア語学習
３．学会等名 日本外国語教育推進機構(JACTFL)（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Sachiko Yokoi Horii	４．発行年 2022年
２．出版社 Springer	５．総ページ数 16
３．書名 Material Mediation in L2 Writing Activities in a College Russian as a Foreign Language Classroom in Japan In New Perspectives on Material Mediation in Language Learner Pedagogy	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関